52号

愛鳥教育

1997.11

全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育　No.52
1997.11

目　次

巻頭言
　実績発表大会について
　　(3)第２次審査～発表(中央大会)
　　---------- 江袋島吉　3
実践報告
　「親子で自然を楽しむ会」------- 染谷優児　4
もりまき通信
　オオタカの調理場 ---------- 森　真希　16
書籍紹介
　「バードウォッチング入門」---- 平田寛重　18
　「鳥類生態学入門」---------- 箕輪多津男 19
論説
　私たちが知らずに
　　壊している野生 ---------- 平田寛重　20
平成９年度　冬期研修会のご案内 ---------- 21
平成９年度　事業計画 ---------- 箕輪多津男 23
編集後記 ---------- 23
愛鳥クイズ ---------- 24

巻頭言

実績発表大会について

(3)第２次審査～発表（中央大会）

会長　江　袋　島　吉

Ⅰ.はじめに

10月中旬に行われる第１次審査（書類選考）を経て、選出された10の団体は、12月上旬に開かれる中央大会に出場をして発表をし、覇を競うことになるが、その割合はほぼ次のようになる。すなわち、学校9～10（小6～7、中1～2、高1）、一般0～1、小学校の内訳は野鳥関係が5～6、その他1～2が通例となっている。

“野生生物保護実績発表大会”（以下“実績発表大会”と称する。）はその趣旨として“国民の野生生物保護思想の高揚に資する。”ことを大前提とし、それを具体化した次の6項目を要望事項として揚げている。以下、これに従って小学校を中心に、それぞれの留意点に触れることとする。

Ⅱ.発表内容

1.保護思想の理解度

(1)教育課程上の位置づけ

①教育目標との関連、特に環境教育における取り扱い

②実施領域（教科・道徳・特活・その他）

③参加対象（全校・特定学年・一部）

④組織（児童・生徒、教師）

(2)環境教育（自然環境の保全、野生生物の保護、資源の愛護、その他）に占める役割。

2.施設の種類・規模・管理

近年、巣箱の利用、その他の施設のあり方についても、生態系保護の立場から、また、自然の姿のままでなどという声があるなかで、どのような創意工夫がなされているか。

3.生態観察・調査・研究

小・中・高と学年が進むにつれて調査・研究的な色彩が強くなっているが、前号でも述べたように、“守る活動”に思いを致し、また行動化を求めることが究極的な目的とするならば、発表自体もこの点に重点を指向すべきであり、学校段階における“守る活動”の内容・方法について、考え直す必要がある。

4.保護の期間

“愛鳥モデル校”は通常１期３年間であるが、２期目以降、またはその前後も継続して活動を推進している場合など、ある程度長期にわたる実践を踏まえた学校の発表に、充実したものが多い。モデル校になって初めて活動に着手し、その期間中（実質２年間）に早くも中央大会を目指したような場合は質的にも見劣りするものが多いので、一考を要するところである。

5.成果とその活用

(1)教育課程の改善に資する。

(2)施設の改良や環境の整備に役立てる。

(3)他の自然教育への発展を心がける。

(4)直接活動にタッチしない児童・生徒に対する広報・周知の徹底を図る。

(5)ＰＴＡや地域住民への啓蒙活動と協力要請。

Ⅲ.発表について

小学校では発表者が数名ないし10名に及ぶ例があり、多数参加という教育的意義は認められるにしても、内容の印象が散漫となり、せっかくの苦労のあとも認められない結果となるので、その数についても十分留意する必要がある。

また、全体あるいは一部について劇化的な手法を用いる例もあるが、これまた見る側の集中力を損ない、かえって逆効果のように思う。

Ⅳ.おわりに

以上、中央大会での所見を中心に、若干の留意点を述べたが、多少なりとも参考になったらと考える次第である。

ところで、今年の実績発表大会への参加者は合計14（小8、中3、高2、一般1）という近年最低のものとなった。全体的な環境教育の進展と野生生物の対象の広がりが、その一因として考えられるが、かねてから懸念されていたとはいえ、誠に残念の極みである。

実践報告

「親子で自然を楽しむ会」

東京私立初等学校協会理科部会有志による

常務理事　染　谷　優　児

東京地区には私立小学校が50校あり、学校間連絡と教員研修のための組織として「東京私立初等学校協会」がある。私は、その理科部会に所属している。

理科部会では、ここ10年ほど、私が内部講師となり、教員研修の一環としてバードウォッチングを年２～３回の頻度で実施してきた。自然観察が理科の教員としての資質を高めるために欠かせないということは言うまでもないが、理科部会としてもそれを実際に行動で表してきたということになる。

学習指導要領やそれに基づいた教科書には、鳥類とりわけ野鳥が登場することは少ないが、バードウォッチングが自然全般を見ていくときに大変優れた自然観察の方法であることも、これまた言うまでもない。

そのようなことで会を重ねてきたが、毎回参加される先生方のレベルも向上し、東京近郊だけでなく宮城県伊豆沼や新潟県瓢湖、山形県最上川河口（酒田市）といった遠方にも出向いて、広く野鳥の生態を目にしてきた。

そうするうちに、教員だけで自然観察を楽しむのでなく、それを児童や父母に還元できないかということを考えるようになった。そこで、児童や父母を対象にした自然観察会を実施できないかと理科部会の運営委員会に提案をしてみた。指導をするということが研修としての意味を持ち、指導をすることによって気付くことも出てくると考えたからである。からである。

運営委員会では様々な意見が出されたが、主任の矢崎茂樹先生が「やってみましょう。」と積極的に推進する立場をとって下さったことから、「親子で自然を楽しむ会」へのスタートが始まった。

そうはいっても、指導のスタッフがそろわねばならないし、フィールドの選定、募集の仕方、実施の形態など、私立小学校であるが故の配慮も必要であるなど、いろいろと詰めておかねばならないことがある。そこで、以下のように「企画検討会議」を発足させ、実施に向けての準備を進めていった。

そして、昨年11月23日（勤労感謝の日）、「京王線聖蹟桜ヶ丘駅」近辺の多摩川河川敷で第１回の「親子で自然を楽しむ会」を開催するに至った。

当日は、ボランティアの指導スタッフが22名（すべて理科部会のメンバー）、親子100名が集まり、岩石・植物・野鳥の三つのテーマで、それぞれが思い思いに楽しむこととなった。

感想を集計したところ、大変好評であることがわかった。理科部会としても自信を深めることができた。

その反省を基に、今年は10月25日（土）に、同じ場所、同じ日程で実施した。指導スタッフ23名、親子192名と盛況であった。指導方法にも工夫をすることができた。

これを基に、来年は年２回に増やそうと準備を進めている。

なお、第１回については「東京私立初等学校協会教育研究紀要41（1996年度）」に、理科主任矢崎茂樹（立教小学校）、植物担当　辻　誠治（日本女子大学附属豊明小学校）、岩石担当　馬場勝良（慶應義塾幼稚舎）、野鳥担当　杉田（染谷）優児（学習院初等科）の共同研究として報告をした。

以下の資料は、その研究紀要からの抜粋である。詳細については、別途お問い合わせいただければと思う。

「親子で自然を楽しむ会」に関する検討会議の日程（企画検討会議）とした。

4月12日(金)　　運営委員会「企画検討会議」最初の提案。

4月の東初協主任会にて理科部会の新しい試みとして発表、趣意書作り。

4月の東初協理事会に趣意書提出。ボランティア的な活動として試行する事を確認。

5月17日(金)	第2回運営委員会	東京地区研修会での企画検討の進め方。
6月　7日(金)	東京地区研修会、理科部総会で会の提案と討議第3回運営委員会	
6月　8日(土)～9日(金)	ネイチャースタディーキャンプで「企画検討会議」	
7月　2日(火)	第4回運営委員会	会議の記録とアンケート用紙配布
9月20日(金)	第5回運営委員会	○第1回企画検討会議
9月29日(日)		＊第1回実踏
10月　5日(土)	第6回運営委員会	○第2回企画検討会議
10月18日(金)	第7回運営委員会	○第3回企画検討会議
10月27日(日)		＊第2回実踏
11月11日(月)	手引き作り	岩石の文面と図版作成。
11月12日(火)		○第4回企画検討会議
11月15日(金)	第8回運営委員会	○第5回企画検討会議
11月17日(日)		＊第3回実踏（最終）植物の図版依頼
11月21日(木)		「参加者の手引き」作り（立教小学校）
22日(金)		「参加者の手引き」作り（立教小学校）
11月23日(土)	当日　無事終了	アンケートを検討しながら反省会
12月13日(金)	第9回運営委員会	○企画検討会議のまとめ。

まとめの結果来年度は、10月25日（土）に同じ場所で行うことになった。

各学校長　殿（理科主任宛と同じものです。）　　平成8年 10月 22日

矢崎　茂樹（東初協理科研究部主任）

「親子で自然を楽しむ会」開催要項

環境問題に関する認識の一般化に伴い、環境教育の必要性が指摘され、先の中央教育審議会答申でも触れられていたことは御承知の通りです。学校教育の現場においても様々な試みがなされつつありますが、自然を対象とする理科教育の在り方について、私学として更に研究を進めていこうと考えています。

このような状況を踏まえ、この度東初協理科研究部員の有志により、「親子で自然を楽しむ会」という企画を立案し、東初協理事会の承認を得て、試行することにいたしました。

過去、東初協理科研究部会では教員の実技研修として、野鳥観察、植物観察、地学観察などの自然観察を継続して行ってきました。そして、その研修を通して、自然観察の指導方法を修得することの必要性に加えて、改めて一個の人間としての自然体験の必要性を認識してきました。

今回、学校の枠を超えて「親子で自然を楽しむ会」を開催するのは、子どもたちや父母の方々に、広く自然について知っていただくための機会を提供するためです。また、私たち教員も、野外での自然観察という広い意味での理科教育の方法について実地に研修し、理解を深め、日々の教育実践にも活かしていきたいとの考えからです。

自然について広く知り深く学ぶには、自然の中に出向き、自然に親しむ活動が有効です。生き物たちの暮らしぶりや様々な自然の形態の中に新しい発見や知見が得られ、知的好奇心や自然に対する興味関心が喚起され、自然の不思議さや美を見いだすことができるようになります。そして、すぐ目の前の生き物や事物と心を通わせることから、自然への働きかけが始まります。そこから、更に広く深く自然を学んでいこうといった意欲が高まっていきます。また、野山や水辺の散策は、自然環境への適応力の向上や心身のリラックスの効果なども期待されます。

このように、教育的に大変意義の深い自然観察ですが、指導の仕方によっては、単に専門的知識を与えたり、環境問題の学習に偏った活動に終始する危険性がないわけではありません。

この点について、私たち有志としては、子どもたちに自然についてのバランスのとれた考え方を養いたいと考えています。例えば、いかなる自然にも手を加えてはいけないといった一面的な自然保護観に立つのではなく、人が自然をどのように利用し、どのように関わり合ってきたかということも考え合わせた、幅広い自然認識を身につけてもらいたいと考えています。

豊かで幅広い自然認識や自然観を養うことは、そのまま子どもの人格形成や人間教育に資するものと考えます。この「親子で自然を楽しむ会」がきっかけとなり、親子が語らいつつ、いっそう自然に親しんでもらえるようになることを願っています。

記

1．名称　第１回　「親子で自然を楽しむ会」

2．日時　平成8年 11月 23日（土）勤労感謝の日（雨天の場合は中止。各学校の担当の先生に問い合わせてください。）
　　午前10:00 ～午後2:00頃

3．場所　多摩川堤防・河川敷（右岸・多摩市側）
　　京王線聖蹟桜ケ丘駅下車
　　京王線鉄橋～関戸橋～交通公園にいたる堤防・河川敷
　《集合場所》多摩川河川敷（聖蹟桜ケ丘駅八王子寄り改札口より係が誘導します。）
　《解散場所》多摩市立交通公園

4．目的
〔親子〕自然に触れ、親しんでもらう。
〔教員〕実際の指導を通して、自然観察指導の方法について研修する。

5．内容
〔野鳥観察〕冬の水辺では、北方から飛来し、日本で越冬する鳥たち（代表はカモの仲間）がたくさん見られます。その他、カモメの仲間、サギの仲間、セキレイの仲間、鳥の宝石（翡翠）と言われるカワセミなどが見られます。
〔植物観察〕時期的に植物は少なくなっていますが、オオバコ、オギ、ススキ、イノコヅチ、オナモミ、アメリカセンダングサなどが残っているでしょう。また、同じ川原の中でも水をかぶることが多い所と、少ない所とでは生育する植物の種類や様子が違うことも発見できます。
〔岩石観察〕聖蹟桜ヶ丘の川原では、砂岩、チャート、頁岩、ホルンフェルス、閃緑岩、偽礫岩などが見られます。

6．時程
　10:00　集合《集合場所：多摩川河川敷》
　　ｺｰｽ：京王線鉄橋→関戸橋→交通公園
　12:00頃　昼食〔各自持参した主食とスタッフによる料理〕
　14:00頃　解散《解散場所：多摩市立交通公園》

7．参加者及び申し込み方法
(1) 参加対象者　東京地区私立小学校に在籍する３年生以上の児童とその保護者、家族、その知り合い（ただし、参加する保護者の責任の範囲内とする）。
　＊今年は試行なので、先日のアンケートで教師がスタッフとして参加できるという学校に限らせていただきます。（各校上限10家族程度）
(2) 参加費　200円/人（保険料、資料代、おかず代）当日お持ち下さい。
(3) 申し込み方法
　所定の申し込み用紙に必要事項を記入し、学校単位にとりまとめ、11/13（水）までに立教小矢崎まで郵便またはFAX（03-3590-9085）でお送りください。

8．事故対策
　傷害保険に団体加入します。50円／人。内訳は、往復途上も対象、死亡後遺障害585万円、入院１日7500円、通院１日5000円。参加申し込み者にのみ適用されます。

親子で自然を楽しむ会 のご案内

日時　平成8年 11月 23日（土）勤労感謝の日　午前10:00 ～午後2:00頃
場所　多摩川堤防・河川敷（右岸・多摩市側）
京王線聖蹟桜ケ丘駅下車、京王線鉄橋～関戸橋～交通公園に至る堤防・河川敷

ぼくは、オナガガモ。北のシベリアから飛んできたんだ。ぼくたちカモの仲間のオスは、みんなおしゃれでバッチリ決めているよ。

ススキの穂

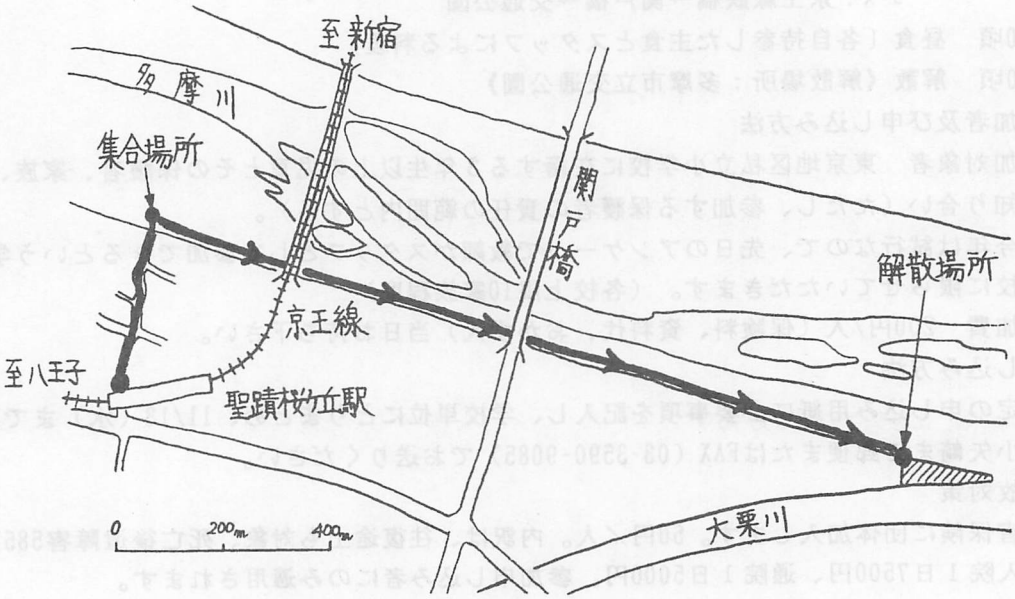
オギの穂

ぼくは、カワセミ。鳥の宝石と言われているんだ。コバルトブルーのぼくの姿をみつけてね。

川原にあるのはみんなススキ？
実はオギというのがあるんだよ。

地面に目をむけてみよう。オオバコ、イノコヅチやオナモミが見つかればラッキーだ！楽しい遊びができるよ。

ここの川原にはたくさんの石があるよ。でも、ただの石っころじゃなくてちゃんとした名前があるんだ。ぼくの名前は石のつぶの様子やでき方によって決められるんだ。



「親子で自然を楽しむ会」のご案内

平成8年 11月　8日

私立小学校で学ぶ児童のみなさんと保護者の方々へ

矢崎　茂樹（東初協理科研究部主任）

この度、東初協理科研究部員の有志により「親子で自然を楽しむ会」を企画しました。場所は、多摩川の川原です。川原は、一見単調な環境のように思えますが、水の増減でかなり様子が変わりますし、細かく見ていくと案外変化に富んでいます。そのため、いろいろな生き物たちが、そこにやってきたり、そこでくらしています。

今回は、野鳥・植物・岩石を中心に観察を予定しています。自然の中に出かけてみると、おもしろいこと、楽しいこと、不思議なことにたくさん出合えます。

晩秋から初冬の一日を多摩川の広々とした川原で、自然観察を楽しみながら、のんびりゆっくりすごしてみませんか。

記

1．名称　第１回　「親子で自然を楽しむ会」

2．日時　平成8年 11月 23日（土）勤労感謝の日（雨天の場合は中止。各学校の担当の先生に問い合わせてください。）
午前10:00 ～午後2:00頃

3．場所　多摩川堤防・河川敷（右岸・多摩市側）
京王線聖蹟桜ケ丘駅下車、京王線鉄橋～関戸橋～交通公園に至る堤防・河川敷
《集合場所》多摩川河川敷（聖蹟桜ケ丘駅八王子寄り改札口より係が誘導します。）
《解散場所》多摩市立交通公園

4．内容

〔野鳥観察〕冬の水辺では、北方から飛来し、日本で越冬する鳥たち（代表はカモの仲間）がたくさん見られます。その他、カモメの仲間、サギの仲間、セキレイの仲間、鳥の宝石（翡翠）と言われるカワセミなどが見られます。

〔植物観察〕時期的に植物は少なくなっていますが、オオバコ、オギ、ススキ、イノコヅチ、オナモミ、アメリカセンダングサなどが残っているでしょう。また、同じ川原の中でも水をかぶることが多い所と、少ない所とでは生育する植物の種類や様子が違うことも発見できます。

〔岩石観察〕聖蹟桜ヶ丘の川原では、砂岩、チャート、頁岩（けつがん）、ホルンフェルス、閃緑岩（せんりょくがん）、偽礫岩（ぎれきがん）などが見られます。

5．時程

10:00　集合《集合場所：多摩川河川敷》　コース：京王線鉄橋→関戸橋→交通公園
12:00頃　昼食〔各自持参した主食とスタッフによる料理〕
14:00頃　解散《解散場所：多摩市立交通公園》

6．持ち物　携帯用の図鑑・双眼鏡（無くても充分に楽しめますが、あればお持ち下さい。）筆記具、メモ帳、ポリ袋（採集用、ゴミ用）、弁当（主食と飲み物）、お椀・お箸（使い捨てでないもの）おかずはスタッフによる料理を予定しています。

7．服装　あまり派手でないもの。防寒対策を充分にしてください。

8．参加方法

(1) 参加対象者　東京地区私立小学校に在籍する３年生以上の児童とその保護者、家族、その知り合い（ただし、参加する保護者の責任の範囲内とする）。
＊今年は試行なので、先日のアンケートで教師がスタッフとして参加できるという学校に限らせていただきます。（各校上限１０家族程度）

(2) 参加費　200円/人（保険料、資料代、おかず代）当日お持ち下さい。

(3) 申し込み方法
所定の申し込み用紙に必要事項を記入し、理科の先生に提出してください。理科の先生が、学校単位にとりまとめ、11/13（水）までに事務局に郵送（FAX）します。

9．その他

安全には十分な配慮をしてプログラムを設定していますが、お子様が怪我などなさらないよう保護者の方はご注意ください。それでも万が一の事故に備え、傷害保険に団体加入します。料金は50円／人。内訳は、往復途上も対象、死亡後遺障害 585万円、入院１日7,500円、通院１日5,000円。（ただし、参加申し込み者にのみ適用されます。）

「親子で自然を楽しむ会」
参加者の手引き

96.11.23
聖蹟桜ヶ丘多摩川の川原
東初協理科部会有志

プログラム

９：２０	誘導開始
９：３０	受け付け開始
	集金、(200円×人数)交換に名前用シールとアンケート用紙配布
	10:00受け付け終了。遅れて来た方は、その学校の先生まで。
１０：００	説明開始
	諸注意：石を投げない。走らない。釣り人、バーダーの近くを歩かないようにする。避けられなかったら静かにする。
１０：１５	観察始め
１１：２０	移動始め
１２：１０	交通公園前で着いた順に豚汁、ホイルステーキで食事始め。
１３：３０	鳥・植物・石合わせ。質問タイム、アンケート提出。
１４：００	解散　後かたづけにご協力お願いします。

指導者　BWは鳥中心

BW杉田(学園)	辻(聖明)	田中(立教)	矢崎(立教)
BW中村(自由学園)	高野(武蔵野東)	村野(東洋英和)	小坪(光塩)
BW河合(国立学園)	岸下(東京文化)	長澤(聖明)	佐藤(聖徳大学附属)
大河内(聖徳学園)	馬場(観応)	川崎(国立音大附属)	藤井(白百合)
五十嵐(立教)	白数(聖和)	青野(武蔵野東)	武田(聖明)
清水　(観応)	林田(麻布)		大石(聖明)

＜石＞

川原にはたくさんの石があります。それをひろって見てみましょう。丸い石が多いのは、上流から流されてくるうちに角がけずれたからです。大水の時には、この川原も水の中になってしまいます。このたくさんの石は、その時にここに積もった物です。

石にはちゃんとした名前がついています。その名前は石のつぶの様子やでき方によって決められています。

＜チャート＞　表面がごつごつして、つやがある。硬い性質なので、なかなか丸くなりません。白っぽいすじの模様が入っています。割るとガラスのように少し透き通っています。宝石の水晶と同じ成分です。昔の人は火打ち石として使っていました。

（赤チャート）
チャートの中でも鉄分が混ざって赤くなったり、黒くなったりしている物があります。

＜砂岩＞茶色っぽいものが多く、砂の粒からできているので、手触りは少しざらざらしています。角の丸くなっている物が多いのは、チャートより柔らかいので流れで削られやすいからです。地層の縞模様がみられる物もあります。

＜礫岩＞砂の粒の他に大きな小石の粒からできています。黒っぽい粒が入っています。

<ホルンフェルス>黒くて丸い。泥岩がマグマに加熱されて変化してできたものです。元の泥岩より硬くて、割ると鉱物の結晶がキラキラと光ります。水で濡らすと黒い碁石のようになります。

<石英閃緑岩>白っぽくて丸い。ワカメご飯のおにぎりのように、黒い粒と白い所がくっきりと見えます。多摩川にはあまり多くありません。この石はマグマが地下の深い所でゆっくり冷えて固まったものです。多摩川の他の石とはでき方が違います。

<石灰岩>この付近には少ないので、見つけたらえらいです！白くて丸く、表面は少しでこぼこしていますが、感触（手触り）はすべすべしていて柔らかいです。形がはっきりしない白い斑点があります。塩酸をかけると泡が出ます。石灰質の骨格をもった生物の遺骸から出来た物があります。割れやすく水に溶けやすいので、上流には多いけれど、流れてくる間に砕けたり溶けたりしてしまいます。

<その他の石>　コンクリート、アスファルトなど人工的な石や大谷石など、多摩川の上流には無い石もあります。コンクリートは石灰岩が原料なので、塩酸をかけると泡を出して溶けます。

＜植物＞

川原にはどんな植物が生えているか知っていますか。多摩川には多くの植物がみられますが、このうち、この時期に見られる特に目につくものや、面白いものを紹介しましょう。おぼえることが目的ではありません。

Ⅰ．川原の草原について

川原には、ほかの土地とはちがう独特の草原がみられます。それは、たえず水量や水流が変化しているからです。また、流れる水の３つの働き（けずる、運ぶ、積もらせる）によって土地のようすが変わっていくからです。川原の草原はまとめて河辺草原といわれます。またたびたび冠水する（水をかぶる）ので、冠水河辺草原ともいわれます。

河辺草原は、大きく分けると２つのタイプがあります。１つは、流れに近く、増水のたびに冠水するところにできる草原(A)です。もう１つは、冠水することが少ないやや高い所（高水敷）にできる草原(B)です。それぞれおもに次のような植物がみられます。

（A）：コセンダングサ、ケイヌビエ、オオイヌタデなどの１年生草本

（B）：オギ、ヨモギ、カワラヨモギなどの多年生草本。

Ⅱ．植物

［草の実のブローチ］

川原を歩いていると、セーターやズボンに実がつくことがあります。それは次のような実です。動物や人の体について広がり、種を広げて仲間をふやしていくのです。

コセンダングサ（キク科）

オオオナモミ（キク科）

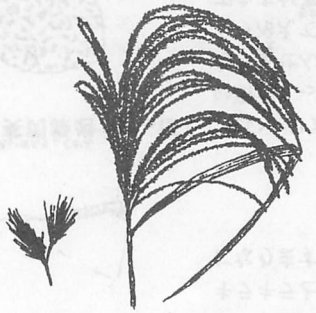
イノコヅチ（ヒユ科）

チヂミザサ（イネ科）

［似ているけれどちがうよ］

ススキとオギ：　オギは川原でよくみかける植物ですが、ススキにとてもよく似ています。だから、川原で見るオギをススキだと思いこんでいた人も多いかもしれません。よくみると下の表のようなちがいがあります。

	オギ	ススキ
生える場所	湿った草原	ふつうの草原
茎の立ち方	まばらに立つ	株立ちする
穂の毛の色	銀白色	白かうすい紫色
芒	なしまたは短い	長い



オギ

ススキ

［同じなかまだけれどあまり似ていないね］

オオバコとヘラオオバコ（オオバコ科）：　オオバコもヘラオオバコもグランドや道ばたのような、よく踏まれるところに見られます。同じなかまですが、図のように葉の形や実のつきかたがかなりちがいます。

オオバコ

ヘラオオバコ

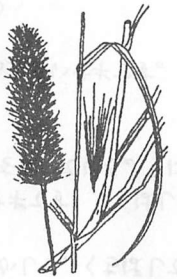
［こんなものもみておこう］

メヒシバとオヒシバ（イネ科）：　和名は雌日芝と雄日芝で両方とも日当たりの良い場所を好んで生えます。メヒシバの雌はオヒシバよりもやさしく、オヒシバの雄はメヒシバよりも力強く生えていることを表しています。

メヒシバ

オヒシバ

チカラシバ（イネ科）：和名は力芝で、大きな引き抜きにくい株をつくるためこの名前がついています。道ばたや空き地でよくみられます。



ヤハズソウとマルバヤハズソウ（マメ科）：　矢筈の名前は、葉の先を指でつまんで引っ張るとＶ字形にきれいに切れることからつきました。手にとってやってみましょう。ヤハズソウとマルバヤハズソウがあります。

ヤハズソウ　　マルバヤハズソウ

＜野鳥＞

○野鳥は、いつも同じ場所にいるのでしょうか？

いいえ。必ずしもそうではありません。野鳥は、大半の種が翼を持ち、飛ぶことができますから、その特性を生かしてあちこちに移動をすることが多いのです。

季節に応じて移動をすることを「渡り」と言い、渡りをする鳥を「渡り鳥」と言います。渡り鳥は、大まかに「夏鳥、冬鳥、旅鳥」として区分できます。

・夏鳥……夏に渡って来る鳥

・冬鳥……冬に渡ってくる鳥。カモやハクチョウの仲間がその代表と言えます。

・旅鳥……渡り（旅）の途中に立ち寄る鳥。シギやチドリの仲間がその代表と言えます。

渡りをしない鳥を「留鳥」と言います。スズメやカラスの仲間はその代表と言えます。留鳥ではあっても小規模の移動をする場合は「漂鳥」と言うこともあります。モズやウグイスなどがその代表と言えます。

※　ただし、これらは地域によった見方であることに注意する必要があります。例えば、カモ類は、夏にシベリアで子育てをし、冬は日本などの暖かい地方で過ごします。シベリアでは夏鳥と言えますが、日本では冬鳥となります。

ちなみに、多摩川では９月頃から飛来し始め、１２月にはほぼ出そろいます。そして、翌年３月頃から北国へ繁殖のために帰っていき、４月にはもうその姿を見ることはできません。

○カモのオスは、とってもおしゃれ！

一般に、カモのオスは、体の色や模様がとても目立ちます。これには、それなりのわけがあります。

カモの仲間は、冬を日本などの暖かい地方で過ごしますが、翌年の春は繁殖の相手といっしょにシベリアに向けて旅立ちます。繁殖のために散らばってからでは、相手を見つけることが難しくなるからです。それで、オスは、体の色や模様をとても目立つものにしてメスをひきつけ、旅立つ前に結婚の相手を得るのです。

しかし、自然界の中で体の色や模様が目立つということは、それだけ天敵の目にもとまりやすいことになります。しかし、身の危険よりも子孫を残すことの方を優先させたいのでしょう。オスもなかなか大変です。

○カモのメスは、とっても地味。

オスとちがって、カモのメスは、一般に、体の色や模様が地味です。カモたちが子育てをするのは、シベリアの湿地帯で、アシなどの水草が生えているような所です。メスの体の色や模様は、この湿地帯の中では、まさに迷彩色となり、環境の中にとけ込んで天敵に見つからないような効果を上げます。つまり、地味な色は、天敵から身を守る「保護色」なのです。

《観察できると思われる主な鳥》

■カモの仲間

〈カルガモ〉

くちばしの先が黄色いのが特徴。ただし、オスもメスも体の色や模様は同

じです。渡りをしないので、一年中見られます。

〈マガモ〉

オスは、黄色いくちばし、緑色の頭、白い首輪、茶色の胸などがよく目立ちます。メスは、下くちばしがオレンジ色です。マガモを飼い慣らしたのがアヒルです。

〈オナガガモ〉

尾羽が長いカモです。オスは、茶色の頭をしていますが、後頭部にかけて白い筋が入り込んでいます。

〈ハシビロガモ〉

くちばしの幅が広いカモです。オスのくちばしは黒ですが、メスのそれは色が薄く、下くちばしはオレンジがかっています。オスは、緑色の頭、黄色い目、茶色い横腹などが目立ちます。

〈コガモ〉

体の小さいカモです。オスは、茶色の頭で、緑色のたれ目のサングラスをかけたように見えます。おしりのクリーム色もよく目立ちます。

〈ヒドリガモ〉

オス・メスともに茶色の頭で、オスは頭の中央が黄色くなっています。

〈オカヨシガモ〉

オス・メスともに、おしりの黒がとても目立ちます。メスは、下くちばしがオレンジ色です。

■サギの仲間

シラサギというサギは、いません。全身が真っ白なサギの仲間には3種類あります。大きい方から、ダイサギ・チュウサギ・コサギです。多摩川では、ダイサギとコサギがよく見られます。

〈ダイサギ〉

体の大きいサギです。冬になるとくちばしが黄色になります。水中に立ち、すばやく首を動かして、くちばしで魚をとらえます。

〈コサギ〉

体の小さいサギです。くちばしは黒です。足は黒ですが、指だけが黄色いので、黄色い足袋をはいているように見えます。

〈アオサギ〉

日本では最も大きいサギです。体の色は、青みがかった灰色です。

■カモメの仲間

〈セグロカモメ〉

大型のカモメです。背中が黒いカモメという名前ですが、実際は、灰色です。翼の先が黒く、白い斑点が見られます。足の色は、肉色（肌色）です。

〈ユリカモメ〉

小型のカモメです。夏は黒い頭をしていますが、冬になると目の後ろに一点だけ残して、後は真っ白に変化します。足の色は、やや暗い赤です。

■セキレイの仲間

セキレイの仲間は、尾羽を上下に動かす習性があります。波形に上下しながら飛びます。

〈ハクセキレイ〉

顔の白いセキレイで、目を通る黒い線があります。おなかは白く、背中が灰色です。チチン、チチッなどと鳴きます。

〈セグロセキレイ〉

背中が黒く、おなかは白いセキレイです。黒い顔の目の上に白いまゆのような線があります。ジュン、ジジッなどと、やや濁った声で鳴きます。日本にしかいない特産種です。

〈キセキレイ〉

背中は灰色で、おなかが黄色いセキレイです。目の上に白いまゆのような線があります。チチン、チチッなどと、ハクセキレイよりも鋭い声で鳴きます。

■カラスの仲間

カラスは、体の色は黒でも（本当は、紫がかった独特の色なのですが）、くちばしの太さの違う種類があります。

〈ハシブトガラス〉

都会に住んでいるのは、ほとんどがこのカラスです。くちばしが太く、おでこが出っ張ったように見えます。カアカアと澄んだ声で鳴きます。

〈ハシボソガラス〉

森とその周辺の境界あたりに住む、どちらかというと田舎のカラスです。くちばしは細く、おでこはなだらかです。ガアガアと少し濁った声で鳴きます。

■その他の鳥

〈カイツブリ〉

潜水するのが上手な小さな鳥です。「ケケケケ…」と、人の笑い声のような声を出します。

〈トビ〉

立派なワシタカの仲間ですが、他のワシタカのように小鳥類を襲ったりすることはほとんどありません。翼を広げたまま、ゆっくりとグライダーのように飛びます。少し開いた尾羽の先端が平らになり、ちょうど三味線のばちのよう

な形に見えます。

〈カワセミ〉

緑がかった青い色の美しい鳥です。背中の中央の明るい色がよく目立ちます。オス・メス同形ですが、メスは下くちばしが赤色です。水に飛び込み、くちばしで魚をとらえます。

〈カワウ〉

かなり大型の鳥です。独特のややせっかちな羽ばたきをしながら、上空を通過していくのが見られます。上野の不忍池や浜松町の浜離宮などをねぐらや繁殖場所にしています。餌を求めて、多摩川や、もっと遠くの相模川あたりまで出かけていきます。水にもぐり、魚を呑み込んでとらえます。

〈スズメ〉

街中でもおなじみの鳥です。ただし、多摩川のような所では、スズメのように見えても、実は別の種であったりすることがありますから、注意しましょう。

〈カワラヒワ〉

川原にいるヒワです。肉色（肌色）の太いくちばし、オリーブ色の背中、飛んだとき翼に見られる黄色い帯などに特徴があります。キリリ、コロロと鳴き、波形に飛びます。

〈ヒバリ〉

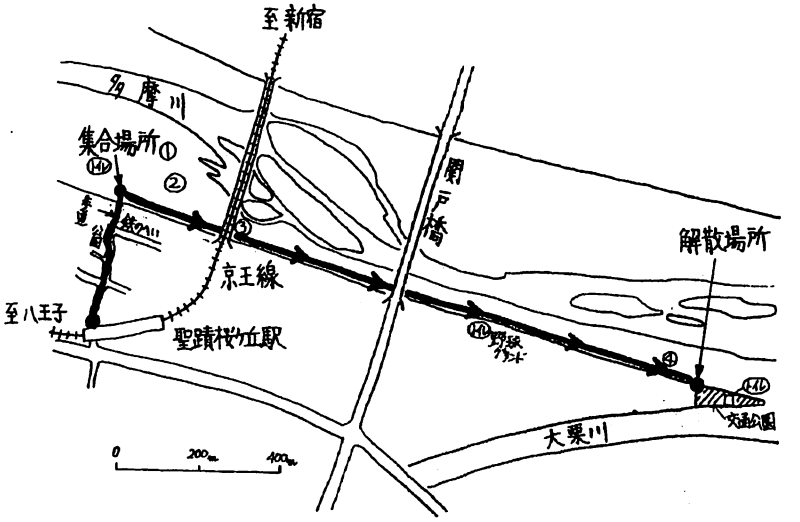
短い草丈の草原で一年中過ごします。頭の羽が立っています。高い空に舞い上がり、ピーチクとさえずります。

〈ヒヨドリ〉

ピーヨという強い鳴き声から、その名がつきました。灰色のボサボサ頭と、茶色のほおが特徴的です。波形に飛びます。

〈モズ〉

オスは、目を通る太くて黒い線と、止まった時に見られる翼の白い斑点に特徴があります。メスの胸には、茶色の編み目模様があります。尾羽を上下に振ったり、くるくると回したりする習性があります。



学校名：

氏　名：

もりまき通信

オオタカの調理場

東京農業大学農学部栄養学科４年　森　　真　希

● 調理とは

大学の授業でこんな話を聞いた。「『調理』は人間しかしません。」これを聞いておやっと思った。この話の寸前まで、いかに食事を簡単に作るか、どこまでが調理なのかという話題が続いており、食材にちょっとでも包丁を入れたり、あるいはレトルトパウチの袋を破く作業も「調理」に入るのではということであった。

確かに、切る、加熱する、洗う、盛り付ける等々、調理と呼ばれる動作には様々なものがあるが、「人間しかしません」というのはちょっと引っかかった。その名の由来にもなったアライグマが食べ物を洗うことはどうなのか。イモを海水で洗っているサルはどうなのか。食べるために、食べやすくするためにその食材に対して行われることは全て調理と言ってはいけないのか。

それらをもし調理と言ってもいいのなら、案外様々な生き物たちが色々な調理をしているのかもしれない。

● 狩り場と調理場

私が住んでいる家から自転車で15分の所にオオタカが生活している森がある。最近は余裕がなくてサボり気味だが、カメラと双眼鏡を手に通い続けて６年目になる。タカの繁殖期には出入りを控えているが、森のあちらこちらにオオタカが調理場として使っているお気に入りのポイントがある。秋から冬にかけてその場所を調べ、オオタカがどんなものを食べているのかを確認しているが、行動圏の調査もどきにも利用している。

狩り場と調理場が同じだと思われている方が多いが、別物であるという。お気に入りの狩り場で捕らえた小動物をお気に入りの調理場で調理することが多いということだ。

私のフィールドのオオタカは中型の鳥をよく食べている。鳥には全身に羽毛がある。オオタカはこれが嫌らしい。落ち着いて調理できる場所を見つけたら、とにかく片っ端から羽をむしりとるのである。食べやすくするために、翼も体羽もくちばしで抜いたり、はさみ切ったりするのだ。その跡はまるで羽毛布団の中身をまき散らかしたようである。

● どんなところが調理場になるのか

これまで私が見てきたものをまとめると大きく分けて３つのタイプがあるようだ。一つは直接地面の上、二つ目は横になっている木（倒木又は生木の横枝、ある程度の太さが必要）、三つ目は切り株の上面で、それぞれ羽を除去するのに使われている。

ただし、見つけた調理場が全てオオタカのものとは限らない。他の猛禽類が同じ場所を利用していることもあるそうだ。この３つのタイプの特徴としては、比較的上が開けている場合が多い。

● メニューの中身は？

私が森に通い始めた頃は、色々な鳥が食べられていた跡が残っていた。アオバト、キジ、ツグミ、コガモ、マガモ、コサギ、カケス、キジバト、ムクドリ、コジュケイ等々、中型の野鳥がメニューにされていた。ところがこの２～３年、10個の調理した跡を見つけたら７～８個はドバトという状態が続いている。季節によって変化はあるが、私の通うフィールドで生活しているタカの主食はドバトと言ってもいいかもしれない。数も多く、肉付きも良く、捕らえやすいドバトがタカに食べられやすいのも当然と言えば当然かもしれないが、生態系のつながりを考えると本当にこれでいいのかなぁと思ってしまう。

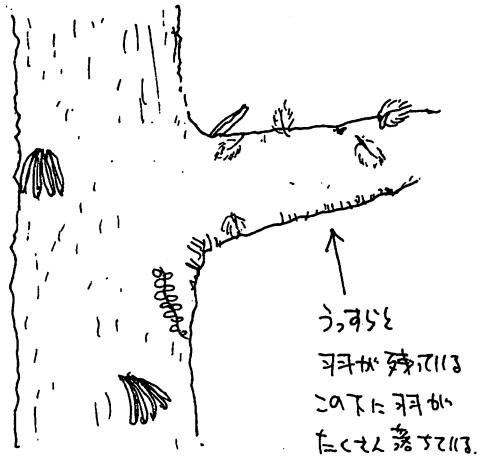
● とにかくみんな一生懸命

食うほうも食われるほうもみんな必死に一生懸命生きている。そのエネルギーのようなものを林床に散らかった羽毛を見ながら感じる。タカの残したフィールドサインから、様々なことを読み取れるが、タカの生活の邪魔にならないように注意が必要である。

あなたの身のまわりにも、食う食われるの命のドラマの跡があるかもしれませんよ。

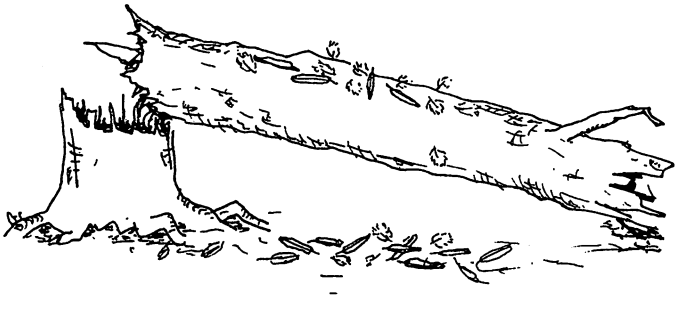
① 地面に直接

② その1　生きている木の太い横枝

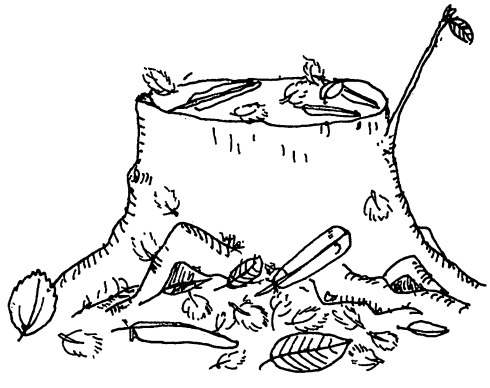


② その2　太い倒木

たまに足輪付いた鳥の
あしが残っていることがある。



③ 切り株



書籍紹介

「バードウォッチング入門 ー鳥の生活を観察するー」

浜口哲一著　文一総合出版発行　1,600円（本体）

常務理事　平　田　寛　重

バードウォッチングという言葉のついたタイトルの本はだいぶあり、筆者が知っているものだけでも10冊を越えます。いずれも入門書ですが、今回紹介する本は、副題が示すように鳥の生活を観察するというテーマがあり、鳥の名前だけ知れば終わりというバードウォッチングに一石を投じるものです。

前半は「野鳥と親しくなるために」というテーマで、野鳥観察の基本である太陽を背にして歩くから始まり、道具、鳥の見分け方、形態観察のポイント、行動観察のポイント、記録の取り方や活かし方、マナーや自然の見方など、バードウォッチングを通して野鳥をどのように見ていったらよいかの方法を入門者向けに解説しています。

後半は「野鳥の生活を理解するために」というテーマで、ユリカモメやハクセキレイなど身近な野鳥を種毎に挙げ、観察の視点について述べています。野鳥を見るということはどういうことなのか、野鳥を観察していく中で見えてくるもの、鳥と人とのかかわり、鳥と環境とのかかわりを知るためにどのように鳥を見ていけばよいのか等々、野鳥理解のための観察のポイントについて的確な視点が述べられています。

例えば、簡単な見方として、行動の中でも割と面白く見ることができる採餌方法についてイラストを使って説明しています。野鳥をじっくり見ることによって今まで知らなかった世界が見えてきます。

また、長期的に観察記録を蓄積していく中で見えてくるものがあることが、ヒヨドリを例に説明されています。冬期、農耕地にいる個体と林にいる個体の違いについて、その鳴き声や鳴き方の違い、体色の濃淡の差などで見極めることができること。農作物の被害とヒヨドリの習性の変化の関連などヒヨドリの生活から人とのかかわりが見えてくること。もう一つ、ヒヨドリの食性と餌の関係を嘴の大きさと木の実の大きさで関連付けると、種子運搬者としてのヒヨドリの嘴に合うように木の実の大きさが特殊化したのではないかというように鳥と自然のつながりを考えることができることなどです。

それから、後半の種毎の解説では、行動についてのイラストが描かれています。これは、欧米の図鑑のよい点を取り入れたものと言えますが、野鳥観察時に何を見ればよいのかのヒントとしてとてもわかりやすいものです。何を見てよいかわからない初心者にとっては、言葉による説明より図示されていることの方がわかりやすく、野鳥を学んでいく上でとても適切なアドバイスとなります。

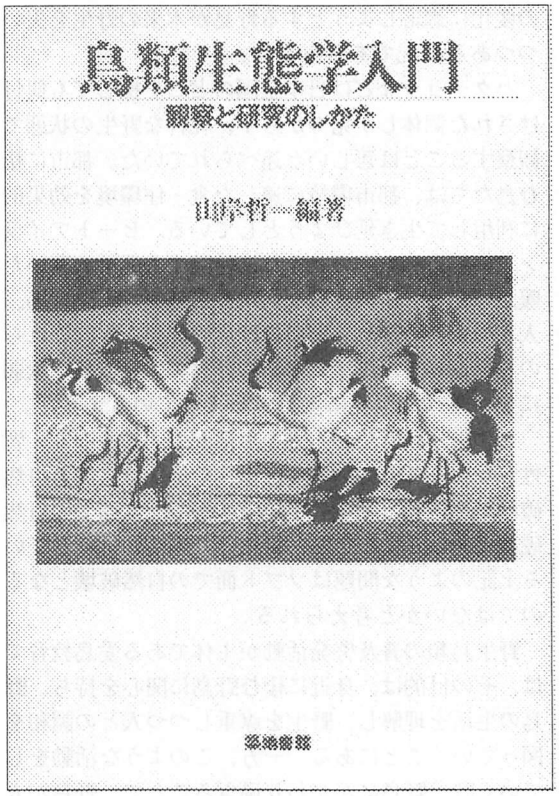
愛鳥教育の中でも「野鳥観察を通して野鳥理解をどのようにしていくか」は立ち遅れている分野の一つです。特にこの本の後半で述べられている種毎の観察の手引きは、指導者が子どもたちまたは初心者に対して、野鳥の何に着目していくのか、野鳥の何を見ていくことが野鳥観察なのかといったことを指導していく際に、たいへんに参考になる内容です。ここに述べられているようなポイントをワークシートなどを活用しながら観察指導をしていくことによって、野鳥を同定した後の野鳥理解のためのプログラムを実施していくことができます。

書籍紹介

『鳥類生態学入門　観察と研究のしかた』

山岸　哲　編著　築地書館(株)　1997年4月　2,500円(本体)

事務局　箕　輪　多津男



鳥類の生態についてこれから研究を始めてみたいという人、あるいは現に生態観察等を行ってはいるものの、もう少し深く生態について知りたいと思っている人にとって最適な入門書と言えるのが本書である。

鳥類の行動・食物・個体数等の調べ方から、ホルモンやＤＮＡ分析による生態学へのアプローチに至るまで、その内容はかなり幅広い分野にわたっている。それぞれの項目については、その道の言わばスペシャリストによって執筆されており、どのページを開いても興味が尽きない。また、本文中には、各種鳥類の実際の生態についての解説が数多くちりばめられており、楽しみながら読み進められること請け合いである。

本書で紹介されている具体的な調査研究方法については、フィールドさえあれば今すぐにでもできるものもあれば、かなり大がかりな設備や精密な分析装置が必要なもの、あるいは相当な知識と経験を必要とするものまでと様々であるが、どのような方法を選択するかは、読者本人の今後の目標（知りたいと思うこと）次第ということになる。また、本書を参考にして、新たな調査研究方法を考案していくことも重要であろう。それが、編者の願いにもなっているようである。

なお、本書の最終章は「鳥類と人の共生を目指して」というタイトルになっている。鳥類に関するあらゆる研究がそこに繋がっていくものであるように、愛鳥教育の実践もまた目指すところは同じであると信ずる次第である。

論　説

私たちが知らずに壊している野生

常務理事　平　田　寛　重

都市鳥研究会誌の50号で松田道生氏が都市鳥化ということで巻頭言を書かれている。それを読むと、現在は人間と野鳥とのかかわり方を含め、都市生活の変化に適応しようとする野鳥が本来の野生を失いつつある状況であるらしい。

ハクチョウなどは日本全国のどこを探しても餌付けされた個体しか見つからず、純粋な野生の状態で観察することは難しいと述べられていた。都市に棲む鳥たちは、都市環境に適した食・住環境を効果的に利用して生き延びようとしている。ヒートアイランドの都市そのものとそれに付随する暖房の利いた暖かい建物、餌の豊富な河川や農地やゴミ処理場、人家のえさ台や熱心な餌付け症候群の人々、これらの鳥をとりまく環境が本来の野鳥の生息環境を軟弱に生きられる環境に変えてしまっているようだ。

このように野鳥が本来の生活ができなくなり、習性が変化してきていることを、松田氏は立派な自然破壊だと述べている。環境破壊がハード面での自然破壊であるとするなら、私たちの生活に付随している上記のような問題はソフト面での自然破壊となるのではないかと考えられる。

野生鳥類の普及啓発活動が主体である愛鳥教育では、その目的は、身近に棲む野鳥に関心を持ち、野鳥の生活を理解し、野生を尊重しつつ人との調和を図っていくことにある。一方、このような活動をしていく時、野鳥にかかわり過ぎることで、野鳥が人間への依存性を高めてしまう恐れもある。

私たちが野鳥のためにやっていることは本当に野鳥のためになることなのだろうか。ただ過ごし易い環境の中でぬくぬくと生きて数を増やしていくことが野鳥にとって是なのか。厳しい自然の中で常に警戒心を損なわずに雄々しく生きるのが本来の姿なのか。

人が野鳥に意識してかかわろうとする時は、必ず野鳥へのプレッシャーをかけることになる。野鳥は目も耳も人間以上の能力を持っているので、人を意識することにおいては人以上のものがある。かわいそうだからといって餌をやったり、保護しようといって巣箱を架設したり、間近に見たいからといって餌台に鳥を呼び寄せたり…と人の都合だけで人は様々なかかわりをしているが、野鳥にとってはどんなものなのであろうか。

愛鳥活動の中にも野鳥とのかかわりを深くするために同様なプログラムがある。野鳥の生態や行動の研究をするための活動であっても、野鳥へ何らかの負荷を与えていると考えられる。これらの問題については、野鳥の野生の尊重をどのようにしていくかということを考えながら活動することで、人の側である程度の抑制が行われるようにしていかねばならない。そして、そのような情報を取り入れながら、意識して野鳥とかかわっていくことが肝要である。

しかし、私たちが普段意識しないままに過ごしている日常生活での問題が案外やっかいなのである。ごみと関連する食料やヒートアイランドによる温暖化などの問題は、私たちの生活自体を見つめ直して改善していく努力をしていかねばならない類の問題である。しかし、解決していかなければ野鳥の野生は返ってこなくなる。短時間の内に起こった急激な生態の変化は生命にとって好ましいことなのだろうか。同じ疑問は、人の生き方・暮らし方についても当てはまるように思われる。

より楽をして暮らそうとする私たちと同じように鳥たちも同じことをしているように思える。自分では何もせずに他人がみんな代行して済んでしまいかねない時代は、まるで動物園の動物たちのように、安定供給される食料の中で狩りをせずに腹を満たしている動物と何等変わりはなくなっていくのではないか。都市自体が巨大な動物園となり、そこにくらす鳥たちは軟弱にしかもしたたかに要領よく生きる都市鳥となり野生を失っていく……。

ぬくぬくした部屋、冷房の利いた部屋からガラス戸越しに鳥を気軽に見られる現在の状況は、自然の厳しさを感じることもなく、その意味でとても「自然との触れ合い」を考えられるものではない。より自然が感じられる状況の中での鳥とのつきあいの中から、野生というものを考え直す必要があるように思う。

平成９年度　冬季研修会のご案内

この冬、雪の中の野鳥や動物たちの生活を観察してみませんか。クロスカントリースキーを使っての観察です。スキーをはいたことがない人や、クロスカントリースキーは初めてという人でも大丈夫。ぜひご参加ください。

1．日時　平成10年2月28日（土）～3月1日（日）

2．場所　霧ヶ峰八島が原湿原

3．宿泊　〒393 長野県諏訪郡下諏訪町10618
霧ヶ峰八島が原湿原
鷲が峰ひゅって
TEL 0266-58-5356
FAX 0266-58-5356

※　基本的にマイカーでの参加となりますが、そうでない方は事務局までご相談ください。

4．定員　14名（先着順です。お早めにどうぞ。）

5．内容
雪上における自然観察（キツネ、カモシカ、ウサギなどのアニマルトラッキングを中心に、ハギマシコやウソなどの野鳥を楽しむことができます。運がよければオオマシコに出会えるかも？）

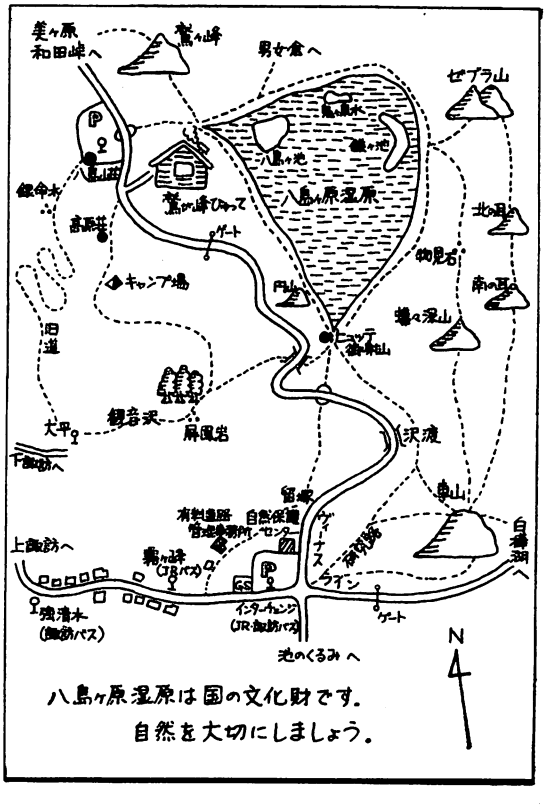
6．主な時程
２月28日（土）第１日
13：30　霧ヶ峰集合
14：30～16：30　歩くスキー講習
18：00～20：00　夕食・入浴
20：00～22：00　スライドによる霧ヶ峰の自然の紹介

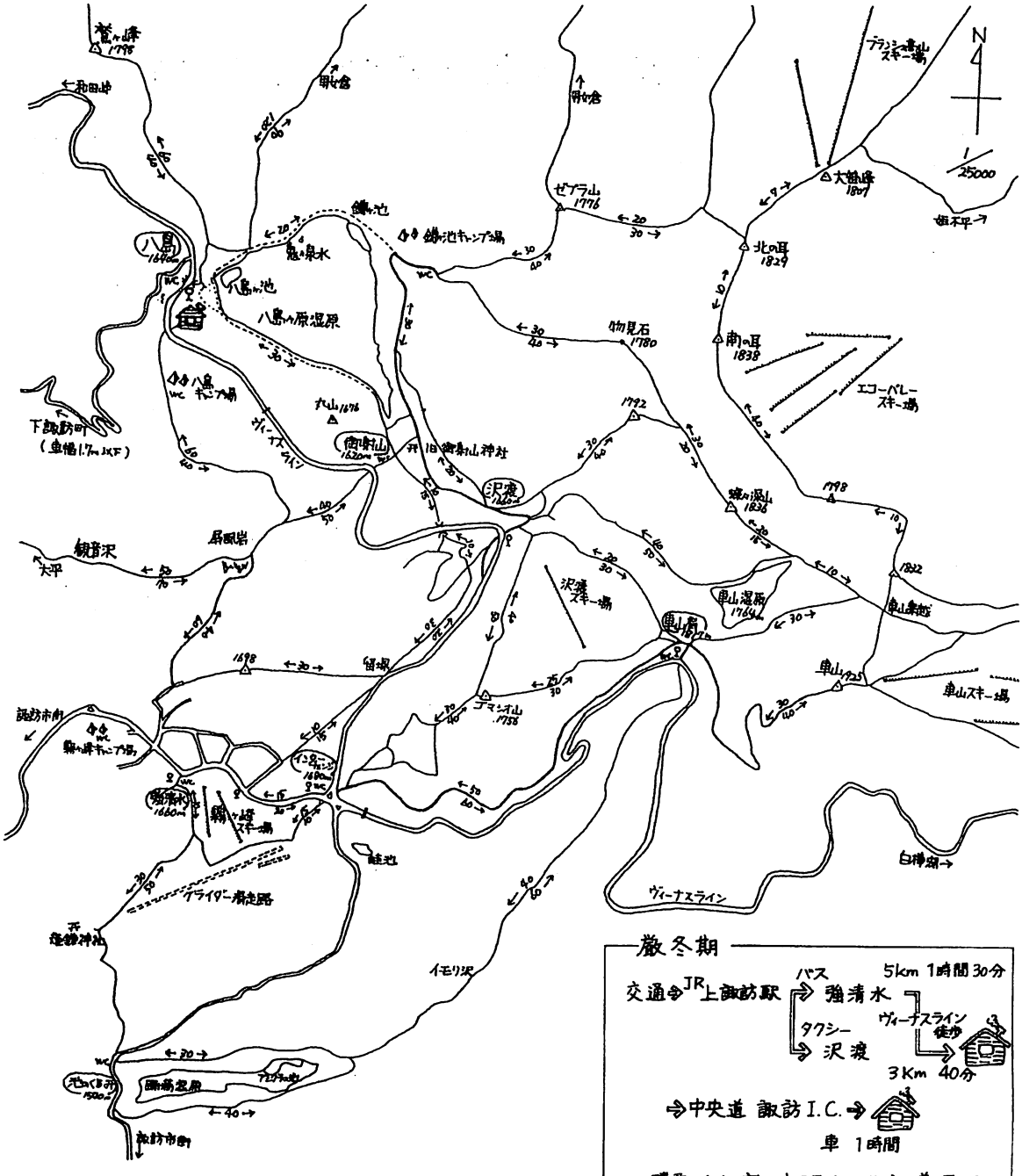
３月１日（日）第２日
7：30～　朝食
9：00～15：00　自然観察会
16：30　解散

7．参加費　14,000円（１泊３食込）
（レンタルスキーが必要な方は、その他に5,000円かかります。）

8．交通
中央自動車道諏訪ICより国道20号と県道を30km（約1時間）

9．申し込み
事務局まで、はがき、電話、またはFAXにてお申し込みください。折り返し、詳しいご案内をさせていただきます。
〒160　東京都新宿区新宿2－5-5
新宿土地建物第11ビル5F
（財）日本鳥類保護連盟内
全国愛鳥教育研究会事務局
担当：箕輪　多津男
TEL 03-3225-3590
FAX 03-3225-3593





厳冬期

交通 JR上諏訪駅 ⇒ バス 5km 1時間30分 ⇒ 強清水

JR上諏訪駅 ⇒ タクシー ⇒ 沢渡

強清水 ⇒ ヴィーナスライン 徒歩 3Km 40分 ⇒ 沢渡

⇒中央道 諏訪 I.C. ⇒ 車 1時間 ⇒ 沢渡

○積雪のためヴィーナスライン沢渡ー美ヶ原間は一般車輌通行止になります。(12/1～3/31)

○ までは除雪していますので、道路状況をお確かめのうえ、おでかけください。

○4WDにチェーンまたはスタッドレスが必要です。

⊗コースタイムは無雪期の3割増くらいです。

⊕吹雪の日もあります。装備を忘れずに…。

平成９年度　事業計画

事務局　箕　輪　多津男

１．「愛鳥教育」の発行

(1) ５２号、５３号、５４号を発行予定

(2) 内　容

①愛鳥活動のヒントを掲載。

②子供向け野外ワークショップの紹介。

③論説では「都市鳥の増加について」等を掲載。

④愛鳥教育のための教材として『野鳥シートⅡ』に関する解説を掲載。

⑤平成９年度秋期研修会、冬期研修会の報告を掲載。

⑥その他の事項

２．研修会

(1) 秋期研修会

期日：平成９年10月10日（祝）～11日（土）

場所：愛知県伊良湖岬、伊良湖ビューホテル

内容：①サシバ等の渡り、および周辺の自然観察

指導：渥美自然の会会長　大羽康利氏

②講演：東三河野鳥同好会会長

皿井　信　氏

全国愛鳥教育研究会副会長

渥美守久　氏

(2) 冬期研修会

期日：平成10年２月28日（土）～３月１日（日）

場所：霧ヶ峰八島が原湿原

内容：①雪上における自然観察

②スライドを使った学習会

３．常務理事会（開催予定）

平成９年４月、５月、６月、７月、８月、９月、11月、12月、平成10年１月、２月、３月

４．その他の行事・審査会への参加

＜審査会等＞

(1) 第50回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい（島根県）

平成９年５月11日（日）

(2) 愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会（環境庁）

平成９年10月17日（金）

(3) 全国野生生物保護実績発表大会（環境庁講堂）

平成９年12月１日（月）

(4) 愛鳥週間野生生物保護功労者選考会（環境庁）

平成９年３月

＜後援行事＞

(1) (財)せたがやトラスト協会

「トラストバードウォッチング」

平成９年12月13日（土）兵庫島河川公園

編集後記

冬期研修会は、雪上での観察となります。クロスカントリースキーを使っての観察ですので、奮ってご参加下さい。

(財) 日本鳥類保護連盟から「野生鳥類の保護」の改訂版が内容も新たに間もなく出版されます。本会の常務理事も愛鳥教育について１章を担当しましたので、ぜひお読み下さい。書店でも販売されます。

（染谷）

愛鳥教育 No.52

平成9(1997)年11月30日

発行人　江袋島吉

発行所　全国愛鳥教育研究会

住　所　〒160 東京都新宿区新宿２−５−５
新宿土地建物第11ビル５F
(財)日本鳥類保護連盟内

電　話　０３−３２２５−３５９０

ＦＡＸ　０３−３２２５−３５９３

会　費　３,０００円

郵便振替　００１８０−７−１２４４２

印刷所　祐　文　社

愛鳥クイズ

【前回の問題】

絵本や童話、物語に出てくる鳥について考えてみましょう。答えは、すべて種名（標準和名）で書いてください。

1．宮沢賢治作「やまなし」に出てくる水の中に飛び込む鳥の名前は？
2．宮沢賢治作「セロ弾きのゴーシュ」に出てくるゴーシュに音楽の指導をする鳥の名前は？
3．椋鳩十作「大造じいさんとがん」に出てくるがんの種名は？
4．椋鳩十作「大造じいさんとがん」に出てくるがんを襲う鳥は？
5．村上康成作「ようこそ森へ」の絵本に出てくる森の番人役の鳥の名前は？

【前回の解答】

1．カワセミ
2．カッコウ
3．カケス
4．マガン
5．ハヤブサ

参考文献　「野鳥」1993. No. 560　特集「宮澤賢治と鳥」

【今回の問題】

今回は、野鳥の名前につく色に関する問題です。名前に次の色がつく野鳥を探してみましょう。ただし、日本で記録のある野鳥の範囲内とします。

1．赤
2．白
3．青
4．黒
5．黄
6．紫
7．灰